

紅葉売

長唄

全詞章

作詞者・作曲者・初演年不詳

荻江節

里の子供がうち連れ立ちて、野道山道踏み分けて、娘盛りや色盛りとて、紅葉売り来るよい川紅葉

松に言問ふ浦風の、落葉衣の袖添へて木蔭の
塵を囲ふよ塵を囲ふよ、所は高砂の尾上の松も年古りて、この下蔭を落葉搔くなるまで
命長らへて、なほいつまでか生きの松、それも久しき名所かな

紅葉紅葉もさまざまあれど、わたしが折りし花紅葉、色と情のふた道すがら、通ふや潮の
紅葉するかを、初恋と後は互ひの思ひ川、深うなるほど浮名も高を

恨みつらみの墨咎なふも、ああ儘の紅葉の恥かしながら、まづ起請誓紙を書き紅葉、末は
夫婦のせうとうじ、出雲で縁を結ぶの神様を祈るかい案じ紅葉見に行く通天の

面白や、あれ山里を見れば、冬枯れに色を染め出す錦や、枝に絡みし蔦葛、照り葉落葉のその
中に、色は変らぬ松と竹

山茶花の花盛り眺めひとしほの、水仙寒菊早咲きの、色も香もある梅が枝や
袖に降り来る時雨、竜田の川波に濡れて紅葉の色も流れの果てしなや

何を恨みにこのたるだいて契りの薄氷、なかなか恋は渡らじと思ひ回せば、実に恋はつらい
身にしも嬉しさの

花の香を見や我も我もと花を飾りて
入り来る入り来る入ります入ります三枳どころか

舞台は人の山々や
四季折々の花尽くし、お土産に楓召されよと言葉に花を飾るも紅葉売り